

# 〈女ことば〉と品格イデオロギー

佐竹 久仁子

## 1. はじめに

近年は、文法書などで記述されているいわゆる〈女ことば〉専用形式のうち、特に文末形式の衰退と性差の縮小が首都圏の調査などで指摘されている(現代日本語研究会編1997・2002)。しかし、一方であいかかわらず新聞の投書欄には若い女性のことばづかいに対する批判がみられ(佐竹2005)、「女らしい話しかた」を指南する女性向けの話しかたマナー本が大盛況である(岡本2010)。また、女ことばは消えたとする小林(2007)が、それでも「T・P・Oに応じた“さわやかで”“すっきりした”女性語」(小林2007:21)を期待し、「自分の思いや意見をしっかり相手に伝えつつ、その根源が人間としての“やさしさ”“いたわり”から発していることを有効に伝えることばづかい、それが、のぞましい女ことばだと言えるのではないだろうか」(同:338)と述べるように、〈女ことば〉専用形式が使用されなくなったとしても、〈女ことば〉は依然として求められているのである。

このように男とは別の話しかたやことばづかいを女に求める背景には、「女らしさ／男らしさ」という自然の性差が存在するという信念が広くわかちもたれている日本社会の状況があるといえる。その「女らしさ」とは、たとえば、「優しい」「振る舞いが優美だ」「こまやかな心遣いができる」「しとやか」といった性質のものである(林1999:178)。「女ことば」という用語は日常会話でごくふつうに使用されているが、そのイメージはこうした「女らしさ」を体現することばづかいで、具体的には「丁寧なことばづかい」ということであろう。

〈女ことば〉と丁寧さとの結びつきは非常に強く、これは常識化して、「女は丁寧なことばづかいをすべきである」という規範となっている。本稿では、この規範が受容されるからくりを敬語のイデオロギー性という面から考察

する。

## 2. 〈女ことば／男ことば〉規範

現代の日本語のジェンダー規範の中心には、ことばづかいについての規範である〈女ことば／男ことば〉規範がある。この規範は、女と男とをそれぞれ均質な集団として二分し、さらに女と男を非対称的に差異化するイデオロギーである。その中味は、「日本語には女／男それぞれの特性にふさわしい別々のことばづかいがある」とするもので、つぎの2つの項目からなる。

(1) 男はぞんざいな形式（〈男ことば〉）を用いてもよいが、女は丁寧な形式（〈女ことば〉）を用いるべきである。

(2) 日本語には女専用の言語形式（〈女ことば〉形式）と男専用の言語形式（〈男ことば〉形式）がある。

〈女ことば／男ことば〉規範は、近代以降、(1)から出発し、それに(2)が加わるかたちで形成されたととらえることができる。

(1)は、女の本質とされる「女らしさ」が従属性や他者への配慮を重要な要素としているところから求められる規範内容で、〈女ことば／男ことば〉規範の核をなすものである。本稿で扱うのは、この(1)をめぐる問題である。

(2)の規範内容としては、具体的には主に文末形式、人称代名詞、感動詞などについて、形式の性差化がおこなわれている。たとえば、文末形式については、常体を〈男ことば〉形式とし、それをもとに女用に変形したものが〈女ことば〉形式とされる（〔例〕〈男ことば〉形式「雨だよ／来るのだね」：〈女ことば〉形式「雨よ／来るのね」）。常体の〈男ことば〉形式すべてに対応する〈女ことば〉形式があるわけではなく、対応する形式がないばあいは、敬体あるいは尊敬語や謙讓語を用いた敬語形式が女にふさわしい形式、すなわち〈女ことば〉とされる（〔例〕〈男ことば〉形式「雨だろ／来い」：〈女ことば〉「雨でしょ／いらっしやい」）。

〈女ことば／男ことば〉形式は基本的にインフォーマルな場面で使用されるものであるが、その多くが東京方言の「山の手ことば」を出自とするものであるため、実際に自分のことばとして使用している人は限られる。しかし、

標準語の基盤であるという東京語の権威を背景に、小説、マンガ、ドラマ、教科書などのメディアの会話文に採用されることで、インフォーマルな標準日本語としての地位を得てきた。人々はメディアをとおしてその諸形式に慣れ親しんでおり、その知識は社会で共有されて、「女と男のことばづかいはちがって当然だ」という規範意識を生みだしている<sup>(1)</sup>。また、一人称代名詞のばあいの〈女：わたし・あたし〉〈男：ぼく・おれ〉という性差形式は、地域によって使用場面の差はあるものの広く採用されている。一人称代名詞は頻繁に使用されるだけに、常に話し手のジェンダーを表示するこれらの形式が〈女ことば／男ことば〉規範を含むジェンダー規範の維持に及ぼす力の大きさは相当なものだといえる。

この(2)の規範内容は(1)と無関係なものではない。〈女ことば〉文末形式の特徴は、「ぞんざい」ととらえられる常体の直接性、断言性を避けるところにある。三尾(1942)は「女言葉」という1章を設けて詳細に記述していることで知られているが、そこでは「女言葉」には「一般の言葉」すなわち「男言葉」のような「だ体」はないとし、その特徴は「丁寧さの表現」だとしている<sup>(2)</sup>。すなわち、〈女ことば〉諸形式は、(1)の規範に沿うかたちでの女の常体使用が許されたものとみることができる。

### 3. 〈女ことば〉と敬語

丁寧さは〈女ことば〉規範においてもっとも重要な項目である。そして、丁寧なことばづかいといえ、その中心は敬語ということになる。規範がその力を維持していくためには、ひとつに、人々がすすんで規範に従うような動機づけ、価値づけが必要となるが、〈女ことば〉規範のばあい、敬語使用にどのような動機づけ、価値づけがなされてきたのだろうか。敬語は「敬意をあらわす」ものだから、あるいは「上下関係や親疎関係をあらわす」ものだからといった理由では、女に敬語の使用を動機づけるわけにはいかないことは明らかである。では、敬語にどのような意味を与えることで、女の敬語使用を促すのだろうか。本章では、一般に広く流通している敬語指南書や話しかたアドバイス本をとりあげ、対象読者の性別を指定しないものと女性向

けのものとを比較して、女性向けの本のばあいの敬語のとらえかたの特徴を明らかにし、女の敬語使用がどのように動機づけられているかをみる。

### 3.1 敬語指南書と話しかたアドバイス本

敬語の使いかたを教える本（以下、「敬語指南書」）や話しかた・ことばづかいのマナー、会話術を教える本（以下、「話しかたアドバイス本」）は数多く出版されている。こうした本の需要があることは、ことばづかいに対する人々の関心の深さを意味するといえる。では、これらの本では敬語の使用はどのような意味をもつととらえられているのだろうか。ここでは、2000年代に出版された敬語指南書と話しかたアドバイス本からそれをみてみよう。分析データとしては、国立情報学研究所のWebcat Plusを利用した検索結果から、書名とBOOKデータベースによる目次と要旨を用いた<sup>(3)</sup>。表1は2000年から2010年調査時までの出版点数を示したものである。

表1 敬語指南書・話しかたアドバイス本の出版状況（2000～2010年）

敬語指南書	話し方アドバイス本	計
143 (5)	187 (96)	330 (101)

\* 数字は出版点数。そのうち特に女性読者を対象とするものを（ ）で示した。

話しかたアドバイス本の特徴のひとつは、女性向けに書かれた本が多いところにある<sup>(4)</sup>。特に性別を指定していないものは男性が対象ということになり、岡本（2010）が指摘するとおり「こうした女性の特別扱いは、女性は女性にふさわしい話し方をするべきだというイデオロギーが前提としてあることを示唆している」といえる。一方、敬語指南書では特に女性向けと明示されているものは5点と少ない。大半が職場や仕事の場面での上司や取引先（客）に対する敬語の使いかたを説いた、いわゆる「ビジネス敬語」の解説書である。

### 3.2 敬語指南書で説かれる敬語の役割

敬語指南書（143点）の書名・目次・要旨のフレーズから、これらの本が敬語について読者に伝えるメッセージをとらえてみよう。〔 〕内は用いられているフレーズの例である。

- ・「正しい敬語」がある

まず、〔正しい敬語〕〔敬語の正しい使い方〕〔間違い敬語〕など、正誤にかかわることばが頻出することから、「正しい敬語」があることが大前提とされていることがわかる。

- ・敬語は常識、使えないと恥をかく

〔社会人の常識〕〔話し方の「常識中の常識」〕〔知らないとゼツタイ恥をかく〕〔間違えると大恥〕〔上司や先輩にはもう聞けない〕〔いまさら聞けない〕〔「いい年して、こんなことも知らないの？」などと言われないうちに〕〔敬語を使えないだけでこいつはダメなやつ…などと思われがち〕〔敬語を間違えればあなたの評価はガタ落ち〕

- ・敬語を使えると評価される

〔仕事でみるみる差がつく〕〔敬語が使えると、「ちゃんとした人」と思われる〕〔同僚や上司から一目置かれる〕〔取引先や、上司に好かれ、同僚に差をつける〕〔できるヤツだといわれる〕〔印象アップ!〕〔敬語がスラスラと話せるようになるたびに、あなたの好感度はドンドン高まっていく〕〔安心して仕事が任せられると評価され〕〔自分を効果的にアピールする〕

- ・あなたは敬語が使えないのでは？

〔間違った使い方をしていませんか?〕〔使っていませんか?とんでもない敬語を!〕〔それを敬語で言えますか?〕〔正しい敬語で話せますか?〕〔その「敬語・マナー」は間違いです〕〔その敬語、ヘンですよ!〕〔自信がある人ほど危ない〕〔あなたの敬語力は、常にチェックされています〕

こうして「正しい敬語が使えず、恥をかくかもしれない」と敬語についての読者の不安をかきたて、「正しい敬語が使えるようになって評価されたい」

という欲求をいだかせて、「正しい敬語の使い方を理解しよう」〔敬語の基本常識をマスターしよう〕と促し、「これだけは押さえておきたい敬語の基本ルール」〔絶対気をつけたい、15のポイント〕〔敬語を正しく使いこなすための5分類〕〔正しい敬語・美しい敬語を身につけるコツ〕などを示して、「これが正しい敬語です」〔こんな時には、こう言う〕と〔敬語の常識〕を教えるのである<sup>(5)</sup>。敬語指南書の説く敬語使用の目的は、上司や客に正しい敬語を使うことで人と差をつけ、人から評価されることにあるといえる。そこでは敬語はまず何よりも仕事が「できる人」という能力や教養をあらわすものととらえられているのである。

### 3.3 女性向けの本のばあい

話しかたアドバイス本でも敬語への言及はよくおこなわれ、敬語について解説する章を設けたものも少なくない。ここでは、女性向けと限定された敬語指南書や話しかたアドバイス本での敬語のとらえかたについてみてみたい。

「ビジネス敬語」についての敬語指南書のばあい、対上司・対客など力関係に差のある人間関係における下位者から上位者に対する敬語が中心に扱われる。特に女性向けと限定していない話しかたアドバイス本での敬語のとりあげかたも同様である。一方、女性向けの本では女を下位者と位置づけて敬語使用を説くわけではない。「女一般」が敬語を使うことの意味を示すのである。では、それはどういうものだろうか。

敬語に言及したフレーズを、対象読者の性を明示していない本と比べてとき、女性向けの本に特徴的なのは、つぎのようなものである（下線部）。

〔美人の敬語〕〔敬語美人になる〕〔簡単！しかもイメージUP効果絶大！すぐにつかえる“美人敬語”〕〔言葉美人の知的な敬語〕〔日本人の心を伝え、大事に使いたい—美しい敬語を使いこなす美人話法〕〔美人力を鍛える！ワンポイント敬語マスター〕〔「美しいことば遣い」には敬語が欠かせません〕〔美しい言葉は、あなた自身の美しさ—正しい敬語があなたを美しく

見せる〕〔正しく、そして美しく敬語を使いこなすノウハウ〕〔気配り上手は敬語上手／この一言で「言葉」のマナーを心得た上品さをアピール〕〔巧みな敬語遣いで、「本物の気品」を身につける〕〔正しい使い方ができると、周囲の人から「人ときちんと接することができる聡明で魅力的な女性」と思われます〕〔知的美人は家庭での敬語にも要注意！〕

キーワードは「美人」「美しい」「魅力」「上品」「気品」「聡明」「知的」である。女性向けの本では、先にみた敬語指南書と同様、敬語の使用は人から評価されるためのものにとらえられているのだが、ただ、特に女のばあいには、敬語は仕事が「できる人」という能力よりも、その人の美しさや品位、知性をあらわすという点が強調されるのが特徴である。すなわち、女にとっての敬語は「品格をあらわす」ものと意味づけられているといえる。

岡本（2010）が指摘するように、女性向けに書かれた話しかたやことばづかいの本では、「このように話せば（本当の）美人／気品ある女性／愛される女性／すてきな女性／聡明な女性になれる」と説かれる。敬語の使用は「このように話せば」の重要な中味である。これらの本の言説は、「女は美しく上品で聡明でなければならない」という「女らしさ」のジェンダー・イデオロギーを提示して、このイデオロギーに従ったばあいにはどれだけ得で評価されるか（すなわち、主流のイデオロギーであることの証拠）を説き、「女らしく」あるための具体的方策として敬語を使用して「品格をあらわす」ように促しているのである。

#### 4. 品格イデオロギーと敬語

##### 4.1 品格イデオロギーとは

学問的言説においても、女のほうが男よりもことばづかいが丁寧であり、それは品格を示すためのものであるという説明がしばしばなされる。たとえば、井出（1993:7）は敬語使用の性差についての大規模な調査にもとづき、「日本の女性はどのように、そして、何故、男性より丁寧な言語表現を使うのかの問いに答えるべく考察を重ね」「女性が高度な丁寧度の言語表現を多

用して話すのは、相手を高め自分を相対的に低めるためだけでなく、自分自身の地位と品位を示すためのものでもある、ということも明らかになった」と述べる。これは、調査対象者である首都圏の中流階層の主に主婦層の女性の意識を示すものとみるべきものであるが、彼女たちには先にみた女性向けの話しかたアドバイス本のすすめるような敬語使用の方策が支持されていることがわかる。また、彼女たちには「女らしさ」のジェンダー・イデオロギーが広く受容されていることも推測できる。ミルズ(2003〔2006:266-271〕)は、丁寧さのステレオタイプは白人の中産階級女性と結びついていると述べるが、日本でも都市の中流階級女性と結びついたものだといえる。

ところで、そもそもなぜ敬語が品格をあらわすととらえられるのだろうか。「品格」とはどのようなものを定義してきたのは権力者—支配層である。「品格」という価値づけは権力者—支配層が自らに権威と正統性を与えるためのものだといえる。権力者—支配層のことばを品格あるものとして価値づけるのも権力者の側の視点にほかならない。しかし、もちろんこうしたとらえかたは支配層のみのものではない。これまで「支配層の人間(のことば)＝上品・優美・洗練・高尚・知的」「被支配層の人間(のことば)＝下品・乱暴・野卑・低俗・無教養」としるしづける階層イデオロギー言説は膨大な数おこなわれて、この価値づけは疑いをさしはさまれることもないほど社会に広く受容されてきた。人々は美しい上品なことばとは支配層のことばであるというイデオロギーを自らのものとし、下品とみなされないために、そして、社会的に栄達するために支配層のことばを習得しようとしてきたのである。

敬語は支配層のなかで発達してきた、上下関係を明示する言語システムで、下位者側の使用、上位者側の不使用を基本の性格とする。下位者側の不使用はルール違反で、無礼・乱暴としてとがめられるが、上位者側の使用はとがめられることはない。とがめる資格は上位者側にあるからである。そして、上位者側の敬語使用は、上位者—権力者側に付与されている価値、すなわち品格のある行為だとされるのである。一方、上位者—権力者側の敬語不使用は当然の権利であることはもちろん、ぞんざいなことばづかいが「下品」とされるどころか、逆に評価を得ることもある。宇佐美(2006:32-33)が、



「力のない者は、丁寧に話せなければ、「下品」であるとして貶められる。それを避けるために、無意識的にも、丁寧に話そうと努力する者たちがいる。しかし、ここで見落としてならないのは、力のある者は、丁寧でないことば使いをしても、「下品」とは見なされないという事実である。それは、「親しみを込めた話し方」であり、「気さく」であるということになる」と指摘するように、力のある者はその特権を利用してブルデュー(1982[1993:73-75])のいう「恩着せがましさの戦略」を用いることができ、それによってまたその力を強化することができる。

宇佐美(2006:32-33)の述べるとおり、「品格」は「力のある者が、コントロールし、作り上げている」もので、「その「品格」という魔法のことばは、力のある者が、そうでない者たちに、明に暗に「丁寧に話す」よう教育するために、巧みに用いてきた」(強調点は原文)ものなのである。

「支配層＝上品」「被支配層＝下品」とするのは、「中央・都会＝洗練」「地方・いなか＝野卑」などと同様に、社会の権力関係にもとづく、力のある側からの価値評価である。ここではこうした価値評価を「品格イデオロギー」と呼んでおこう。「敬語は品格をあらわす」というのも結局はこの品格イデオロギーにもとづくとらえかたなのである<sup>(6)</sup>。

#### 4.2 「敬語＝品格」イデオロギーの原点

「敬語は品格をあらわす」という品格イデオロギーによる敬語観一仮に「敬語＝品格」イデオロギーと呼んでおく一がいつごろ、どのような状況で誕生したのかをここではみてみたい。

支配層のことばとして発達した敬語は、近代日本では天皇制維持のための重要な言語装置として機能した。「修身」や「国語」などの学校教育をとおして、敬語によって皇室崇敬、君臣・父子・長幼・上下の分を示す「帝国臣民」の作法が教え込まれていったのである。天皇・皇室に対する「表敬」の儀式や作法が整備・強化されていく20世紀初頭には、皇室への敬語使用も学校教育における礼法として明文化されている<sup>(7)</sup>。その後、敬語は支配の道具としてますます重視されるようになっていくのだが、それと歩調をあわせる

ように、敬語は「国語」や「日本国民」の優秀性、美風をあらわすもので、世界に誇るべきものであるという国粹主義的な敬語論が登場し、力をもつようになる。その言説は、敬語の階級性、権力性を否定し、敬語の差別性、抑圧性を覆い隠して美化する役割を果たした。

「敬語＝品格」イデオロギーもこうした敬語論において登場したもので、その代表として1924（大正13）年の山田孝雄『敬語法の研究』をあげることができる。この著作は「大正末期になってようやく現れた敬語研究の一大モニュメント」（大石1977：211）と評価されるものだが、その「総論」では、

もとよりこの敬語は上下貴賤の区別をあらはすに適すとはいへども必ずしも階級制度の結果とのみいふべからず。人は人として相交る間に互にその人格を重んじ、その才能知識、徳望、品格等を尊ぶに於いて、それを言語によりて表明することこれ実に自然の人情にしてその存するはこれわが民族間に推譲の美風の行はるるによるものなれば、寧ろ嘉みすべき事なりとす。（山田1924：1-2）

と述べられ、敬語は日本民族の「推譲の美風」にもとづく「自然の人情」によるものであるとして、敬語の階級性、権力性が否定される。敬語の本質を上下関係に求めないとすれば、では、それにかわるものはなにか。そこで説かれるのが、「我等が用ゐる敬語は必ずしも尊崇に限らず、親愛の意をあらはす場合もあり、又言語に品格あらしめむが為用ゐることあり」（同：3）、「実に吾人の国語に存する敬語は単に他人に対して敬意をあらはすに止まらず。それと同時に自己の品格を維持するをも目的とするものなり。即ち若し之を用ゐぬ場合には或は野卑に聞え或は傲慢に見ゆるが故に自ら敬ひ自ら重んずるの士、はた品位をおとさざらむと欲する人、上流の人は上下に通じて敬語を用ゐることを忘れざるなり」（同：4）という、「敬語は品格をあらわす」とするとらえかたなのである。ここに現在まで続く「敬語＝品格」イデオロギーの原点をみることができる。

山田（1924）は、正しい敬語の使いかたを知らない人の例をあげ、敬語を

「正しく用ゐる時はその人品高尚にも優雅にも見え、之を過つ時はその品格劣等に見ゆるのみならず悪意なしと認めらるる時も或は滑稽を演じ或は嘲笑的」(同：7-8)となるから、敬語は正しく使うべきだと述べる。このような、敬語は品格をあらわすもので、正しく使えば高尚・優雅にみえ、間違えれば劣等視され恥をかくというレトリックは、先にあげた現代の女性向けの本とまったく違いはない。ただし、山田(1924)は〈女ことば〉と敬語の関係を論じているわけではない。〈女ことば〉にとって「敬語=品格」イデオロギーが意味をもってくるのは、もう少し時代が下ってからのことである。つぎにこのことについてとりあげる。

#### 5. 近代における〈女ことば〉と「敬語=品格」イデオロギー

女のことばづかいに丁寧さや優美さを求める言説は明治期にももちろん広くおこなわれていたが、だれに対しても敬語を用いて丁寧にというものはなかった。教育家の下田歌子は、「女子が、人と応答するには、なるべく敬語を用ひて、懇懃丁寧なるべしと雖ども、亦能く、其上下尊卑の区別を明らかにして、尊長、同輩、下輩と、混同錯誤せざるやうにあるべし。其尊大に過ぐるが、最も非礼にして憎げなるは、勿論なれども、恭を過して、下賤の者にも、同等の者の如く云ふは、これ將た礼にあらざるなり」(下田1887(明治30)：36)と述べ、また、同じく教育家の三輪田真佐も「敬語のごときは、決して、乱用せざるを以て礼となす。若し、その人に不相応なる敬語を用ひむか、反りて、それを侮辱したらむに等し」(三輪田1902(明治35)：80)と述べている。下田も三輪田も下位者に対する敬語使用を非礼としていましめて、上下関係にもとづく敬語使用の原則を女にも求めているのである。

ところが、その後、この敬語使用の原則は変わっていく。その状況を第3期(1918(大正7)年使用開始)、第4期(1933(昭和8)年使用開始)、第5期(1941(昭和16)年使用開始)の国定読本の会話文にみてみよう。おとなの女から目下(対使用人、母から子、祖母から孫など)へのことばには、第3期は常体の使用がみられる<sup>(8)</sup>。しかし、第4期にはそれが避けられる傾向があらわれ、特に第5期になるとその傾向が著しくなる。たとえば、つぎ

のように、第4期と第5期に共通する教材（ともに第2学年後期の「海軍のにいさん」）で、第4期では常体の母から子へのことばが第5期では敬体に変えられているのである。

・第4期

うらの島にみたおかあさんも、かけて来て、あたまから手ぬぐひを取りながら、／「あゝ、よくかへって来たね。」／と、うれしそうにおっしゃいました。／にいさんは、前よりもずっと色が黒くなって、強さうに見えました。／おかあさんが、お茶をいれて、／「ほんたうにしばらくだったね。まあ、一つおあがり。」とおっしゃいました。

・第5期

うらの島にみたおかあさんもかけて来て、頭から手ぬぐひを取りながら、／「よくかへって来ましたね。」／とうれしそうにおっしゃいました。／にいさんは、前よりもずっと色が黒くなって、強さうに見えました。おかあさんはお茶を入れて、／「ほんたうにしばらくでしたね。まあ一つおあがり。」／とおっしゃいました。

この変更からは、たとえこどもに対してでも女は丁寧な話しかたをすべきだということを示そうとする教科書編者の強い意図がうかがえる。こうした女の敬語使用規範の強化の背景には、「敬語は品格をあらわす」という敬語観の存在があったと考えられる。「敬語＝品格」イデオロギーの敬語観では、「若し之を用ゐぬ場合には或は野卑に聞え或は傲慢に見ゆるが故に自ら敬ひ自ら重んずるの士、はた品位をおとさざらむと欲する人、上流の人は上下に通じて敬語を用ゐることを忘れざるなり」（山田1924:4）というように、品格ある人は相手の上下を問わず敬語を使用するものだとされる。このような敬語のとらえかたをするならば、「上品、優美であるべき女」は当然だれに対しても敬語を使用すべきだということになる。すなわち、「敬語＝品格」イデオロギーは「女は敬語を用いた丁寧なことばづかいをすべきだ」という〈女ことば〉規範に強力な根拠を与えたのである。

戦中期になると敬語を「国語、国体、国民の美点」と称揚する声はますます大きくなり、同時に敬語は「日本語特有の女ことば」の特徴とされていく。このことは初等教育段階から教えこまれた。第5期国定読本では「敬語の使い方」（第6学年前期）としてつぎのように述べられている。

いつぱんに、女は男よりもいつそうていねいにものをいふのが、わが国語のならばしである。したがって、女の使ふ敬語には、やや特殊のものがある。多くは家庭で用ひる物品などに対して、「おなべ」「おさかな」「お召物」とか、「あるひは、「汁」を「おみおつけ」などといふのがその例である。「行く」「来る」を「いらつしやる」といふなども、女らしいことばである。今日では、男も混用したり、あるものはいつぱんに使用されたりするが、それが、度を越すと、かへつてばかていねいになつたり、また柔弱に聞えたりする。(中略) わが国語に、敬語がこれほどに発達したのは、つまりわが国がらの尊さ、昔ながらの美風が、ことばの上に反映したのである。

また、〈女ことば〉と敬語の結びつきを強調した金田一京助は、敬語は「悠久な昔の女性のタブーに源を發した忌言葉に系統を引くものである。その忌みの感情の、無意識の記憶が文化とともに向上して優美な雅言となって女性語ともなり、敬語法ともなったのである」(金田一1941 [1992] :305) と、〈女ことば〉と敬語が同源であるとまで述べる。そして、「日本語の極致は、敬語法の美しさにあるのである」(同:310) とし、「その敬語の、特に微妙で精緻なのは、女性語である。敬称・謙称・恭称が節度に合つて寸分落ちなく、すらすらと流れ出る婦人語を聴いて、我々は間々、うっとり、音楽を聴くように打たれることがある。日本婦道の良さそのものを具体的に見る心地さえするのである」(同:311) と称賛して、「一人前の日本婦人となるには、何はともあれ、この伝統的な日本婦人語、世界に類のない美妙的な敬語法をまず身につけるべきである」(同:312) と女に敬語使用を求めている。金田一は、女性のことばとしては「書きなさい」よりも「お書きなさい」がい

いとし、主婦が女中に怒って言う時でも『お』をつけて悪くない。むしろ、付けた方が日本女性のたしなみある言葉遣いだ」（同：312）と述べている。金田一のイメージした〈女ことば〉としての敬語も、やはり「敬語＝品格」イデオロギーにもとづく敬語だったのである。

## 6. おわりに

本稿では、〈女ことば〉と丁寧さの結びつきに正当性を与え、女がすすんで丁寧なことばづかいを使用するようにしむけるものとして、「敬語は品格をあらわす」という「敬語＝品格」イデオロギーがあることを指摘し、このイデオロギーの成立過程をみた。宇佐美（2006:32）のいうとおり「品格」は「魔法のことば」だが、〈女ことば〉規範の意味を問うためには、この「品格」ということばの魔法をといていく必要があるだろう。本稿はその出発点としたい。

（引用文の漢字は新字体に改め、ルビは省略した。また、引用文中の「/」は原文の改行部分をあらわす。）

### 注

- (1) 〈女ことば〉諸形式はその出自である山の手ことばにおいてもすでに衰退し、「役割語」化しているといえる。しかし、役割語としての使用であっても、ジェンダーの差異を固定し日常化する機能を果たしている点は、「博士語」「老人語」など他の役割語と異なるところである。
- (2) 三尾（1942:428-430）は「女言葉」をつぎのように規定する。
  - ・断定的な表現では、断定の強さをひかえめにするために「わ」をつけるか、「だ」を省略する。その結果、男言葉の「だ体」よりやさしさを増す。
  - ・「だ体」の推量形（だろう）は避けられ、「です体」形（でしょう）になる。
  - ・「か」は女言葉では「です」体形の用言だけにつく。
  - ・命令には敬譲動詞を使用。
- (3) 2010年10月12日検索。敬語指南書は「敬語」を、話しかたアドバイス本は「話し方」

- 「会話術」をキーワードに検索した結果から選んだ。
- (4) 特に男性対象と明示した話しかたアドバイス本は12点あった。そのうち8点は『女に「ウケる」話術』『口説きの鉄則一場を盛り上げ、惚れさせる話し方』『モテる男の会話術—超人気プロコーチが教える』など「女性の口説きかた」を教える内容である。
- (5) 研究書にもこうした実用書と同様の視点をもつものがある。山下(2001:66)は、敬語の「有用性」を前提に「(マニュアル書と同様の：引用者注)「物語」を作り出し、または利用し、利用することによって再生産するという点では、研究者による研究書もマニュアル書も大差ない」と述べて、研究書も敬語使用を「正当化」し規範を生みだしていることを批判している。
- (6) 「上の階層の人は品位がある」という品格イデオロギーをそのまま表明して敬語の説明をするのが、井出(2006)である。そこでは「敬語はどのようにして品位を表すのか」という問題がたてられ、「社会的地位の上の人が公の場で話す時のことば遣い、上品といわれる女性のことば遣いなどが品位を示すといわれるものである」として、「敬語は、日本語以外にみられる敬語についても言えることだが、元来社会階層方言であった。階層の上の人が使う言語形式がより高いレベルの敬語形式である。レベルの高い敬語の言語形式を使う人々の属性やその属性にまつわる特徴の一つが品位や威厳である。これは、ことばそのものに品位や威厳があるのではなく、高レベルの敬語を使う人々の人間的な属性として品位があることが多い。そのことが、使用されることばに反映され高レベルの敬語に品位が映し出されるのである」(134-138)とされる。
- (7) 文部省発表の『小学校作法教授要項』(1910：明治43)、『師範学校・中学校作法教授要項』(1911：明治44)では、「言語応対」の作法事項として「皇室に関する談話には必敬語を用ふべし」をあげている。
- (8) たとえば、「其の時にいさんが／「私にもつかせてみて下さい。」／といひ出すと、おぢいさんが／「とてもまだ。」／とおつしやつたが、おばあさんは／「まあ、ついてみるがよい。」／とおつしやつた。」(第3期第4学年後期「14餅つき」)、「信吉は僕の両親に帰つて来たあいさつをすますと、／「奥様、あのとよは。」／と、さも心配さうにたづねた。母が／「とよちゃんかね。大丈夫であるよ。」／といふと(後略)」(同「22唾の学校」)など。

## 参考文献

- 井出祥子(1993)「世界の女性語・日本の女性語—女性語研究の新展開を求めて—」『日本語学』12-6 pp. 4-12
- 井出祥子(2006)『わかまへの語用論』大修館書店
- 宇佐美まゆみ(2006)「ジェンダーとポライトネス」日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』pp. 21-37 ひつじ書房
- 大石初太郎(1977)「敬語の研究史」『岩波講座 日本語 4 敬語』pp. 205-246 岩波書店
- 岡本成子(2010)「『言葉美人になる法』：女性の話し方を教える実用書の分析」『日本語とジェンダー』10 日本語ジェンダー学会
- 金田一京助(1941)「女性語と敬語」『婦人公論』昭和16年9月号(引用は、金田一京助全集編集委員会編1992『金田一京助全集 第三巻 国語学Ⅱ』pp. 302-316三省堂)
- 現代日本語研究会編(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 小林千草(2007)『女ことばはどこへ消えたか?』光文社新書
- 佐竹久仁子(2005)「〈女ことば／男ことば〉規範をめぐる戦後の新聞の言説—国研『ことばに関する新聞記事見出しデータベース』から」『阪大日本語研究』17 pp. 111-137  
大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 下田歌子(1897)『女子普通礼式』博文館
- 林道義(1999)『フェミニズムの害毒』草思社
- ブルデュー、ピエール(1982)〔稲賀繁美訳(1993)〕『話すということ—言語的交換のエコノミー』藤原書店
- 三尾砂(1942)『話言葉の文法 言葉遺篇』帝国教育会出版部
- ミルズ、サラ(2003)〔熊谷滋子訳(2006)〕『言語学とジェンダー論への問い—丁寧さとは何か』明石書店
- 三輪田真佐子(1902)『女訓の栞』大倉書店
- 山下仁(2001)「敬語研究のイデオロギー批判」野呂香代子・山下仁編著『正しさへの問い 批判的社会言語学の試み』pp. 51-83 三元社
- 山田孝雄(1924)『敬語法の研究』宝文館

(さたけ くにこ・姫路獨協大学非常勤講師)